

『嘔吐』における 1917 年

édition critique の試み

佐々木 徹

Les grandes personnes aiment les chiffres
(Saint-Exupéry)

『嘔吐』をプレイヤード版に収録する際¹、コンタたちはある変更を加えた。それは従来の版であれば JOURNAL の冒頭は Lundi 29 janvier 1932 であったのを、Lundi 25 janvier 1932 としたのである。そしてプレイヤード版の注には Lundi 29 janvier 1932 は現実の日付に合わず、サルトルは aucune intention も持っていなかったと言い、サルトルの了解を得て変更したとある。

『嘔吐』という小説は²、Céline の引用で始まり、Castor への献辞があり、編者の前書きがあり、FEUILLET SANS DATE がくる。早くも DATE という言葉が現れる。そして JOURNAL の冒頭は繰り返しになるがプレイヤード版では（以下、特に断りのない限り便宜上プレイヤード版の日付を用いることにする）Lundi 25 janvier 1932 である。そして翌日は Mardi 26 janvier である。早々と 1932 年が消える。そしてその次の日は Jeudi matin, à la Bibliothèque である。日も消えるわけである。そしてさらに同じ日の場合には曜日すら消え時刻だけになってしまう。サルトルが無造作に日付を書いていたとは思えない。用意周到だという印象を受ける。

¹本論で使用される略号は次の通り。

OR : *Œuvres romanesques*, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1981

FA : *La Force de l'âge*, Gallimard, 1960

LC : *Lettres au Castor et à quelques autres, 1926-1939*, Gallimard, 1983

EJ : *Ecrits de jeunesse*, Gallimard, 1990

ただし筆者の手元にある OR は achevé d'imprimer (,,) le 15 mars 1982 と achevé d'imprimer (,,) le 5 avril 1995 の二つである。本論で「プレイヤード版」あるいは OR と書いた場合にはどちらにも共通する。区別する必要がある際には、前者を旧プレイヤード版、後者を新プレイヤード版と明記する。

² OR p.1718 に書かれている初版本の順序に従う。

プレイヤー版の注だけでは、vendredi 29 janvier ではなく、lundi 25 janvierの方を選んだ理由がよく分からない。筆者に思いつくことはパリでのアニーとの再会の日付が部分的に合うことくらいである。部分的に、というのはプレイヤー版のようにしても完全に話が合うわけではないからである。細かいことになり、またオリエが作っている ERRATA の引き写しになるが³、OR p.74 (2月9日)ではアニーとは20日に会うことになっている。これは「現実」のアニーとの再会の日と合う。ところがOR p.85 (11日)では18日に会うことになる。さらにOR p.123 (17日)には21日に会うことになる。さらにOR p.160 (同じく17日)には samedi に会うことになっている(これも現実と合う)。

日付に関することで奇妙なことはまだある。『嘔吐』のクライマックス、つまりロカンタンがマロニエの木を前にするのが従来の版であれば2月21日、プレイヤー版であれば2月17日である。ところで『嘔吐』の「乞御高評」(prière d'insérer :OR p.1694-1695)によれば、ロカンタンの啓示は le premier jour du printemps に起こったことになっている(OR p.1695)。暦の上では春は3月21日から始まる。従来の版もプレイヤー版も合わない。だから、OR p.1694のような注(bien précoce)が付くことになるのであろうし、OR p.1778の注のように du printemps ではなく de printemps と理解すべきだとするのもプレイヤー版の編者たちの立場からすれば当然なのであろう。けれど、従来の版にあった面白さ(何が面白いかは別問題だが)、つまりちょうど1ヶ月前となっているのがプレイヤー版では消えてしまうのである。またロカンタンは l'hôtel Printania に泊まっている。春も『嘔吐』における一つの重要なテーマなのかもしれない。

オリエは1932年ではなく1934年の1月29日が月曜であるとして次のよう

³ Hollier (Denis) : *Politique de la prose*, Gallimard, 1982, p.123-126

この本に対しては、人により好き嫌いは分かれるのであろう。けれどオリエが実に丁寧に『嘔吐』を読んでいたことは認めなければならないだろう。また、余談になるが、オリエのこの本とプレイヤー版はほぼ同じ頃に互いに独立に-という意味は一方が他方を参照することなく-出版された。それが良かったことなのかどうかはよく分からない。余談をもう一つ付け加えると、この本の英訳は周到な索引つきで1986年に出版され、Acknowledgments でオリエは言う。

Somewhere, I mention the fact that Sartre never lent his reader the helping hand of an index. In this sense, thanks to Robert Harvey, there is now something frankly non-Sartrean, at least in the very last pages of this volume.

オリエの立場を要約して余りあるだろう。

に書く。

ロカントンの様々な冒険（これらもまた著者が1人称現在で語る 1932 年に展開される）をサルトルが書き始めたのは 1932 年である。しかし、それまではリルケの『マルテの手記』に多かれ少なかれ似ていた考察を、より生き生きとしたものに（より非文学的に）するために言葉の本来の意味での私的な日記に変えることに決めたのはおそらく 1934 年であろう。（*Hollier, op.cit., p.122*）

こう書く実証的な根拠をオリエは提示しているわけではない。けれど FA p.208 によればサルトルはベルリンで『嘔吐』の第 2 ヴァージョンを仕上げたとなっている。おそらく 1934 年のことであろう。

さらに付け加えると、オリエ自身の ERRATA には現れていない（彼は見落としたのかもしれない。あるいはオリエ流の読み方の欠点が出てしまったと考えるべきなのかもしれない。）のだが、『嘔吐』のテキスト内においてオリエ説の最強の傍証はおそらく次の一文だろう。

共産主義作家は第二次 5 年計画以来人間を愛している。（OR p.138）

第二次 5 年計画は注にあるように 1933 年から 1937 年。

そして新プレイヤード版の注には旧プレイヤード版にはなかった次の一言が新たに付け加えられている。

ロカントンの日記の日付と照らし合わせるとアナクロニクな参照（OR p.1780）

コンタたちは処置に困ったのかもしれない。サルトルが生きている時にこの矛盾に気が付いていれば、例によってサルトル自身の承諾を得て変更することもあるいは可能であったかもしれないが（とはいえ変更は難しいだろう）、死んでしまってから勝手に手を入れることは許されないと判断が働いたのかもしれない。あるいはまたこの注はプレイヤード版のページ数を変えないための最大限の配慮とも取れる。あるいはまたオリエの ERRATA には現れてきていないからこそ一言だとも取れる。

1934 年説を間接的にはあるが補強する材料はまだある。『嘔吐』においてブーヴィルとパリを除外すれば最も頻繁に登場する都市は、ヴェネチアでもなくローマでもなくナポリでもなく、ロンドンとメクネスである。筆者に

見落としがなければ共に9回⁴。ロカンタンとアニーを考える際にはこの二つの都市を切り離すことは出来ないように思われるが、人口は一桁違う。そして『嘔吐』にはテムズ川、ピカデリー、王立植物園 (les jardins de Kew)、コベントガーデン、ソホーといったロンドンに直結する固有名詞も現れている。ところでサルトルとボーヴォワールがロンドンを訪れたのは1933年の復活祭休暇。そして二人の間で意見の食い違いがあったことはFAに詳しい。『嘔吐』が1933年以降に書かれていることを示唆する材料ではあり得るだろう。また本論ではアニー論を展開するつもりはないが、少しだけ気の付いたことを書いておく。アニーのモデルはシモーヌ・ジョリヴェとされる。FAを読めば、アニーは確かにシモーヌ・ジョリヴェと共通点が多い。しかしFAに描かれているシモーヌ・ジョリヴェがロンドンを思い出させることはないのである。アニーという『嘔吐』における女性登場人物のとらえどころのなさ、存在感の薄さ(筆者はそう感じる)の秘密はロンドン—シモーヌ・ジョリヴェ—ボーヴォワールにあるのではなかろうか。

1932年が現実とは合わず、1934年が合うことはオリエの指摘するとおりである。筆者には1936年が合えばすっきりするのだが、という考えがあった⁵。『嘔吐』においてロカンタンは30歳である⁶。サルトルは1905年6月21日生まれである。よって1936年の1月から2月にかけては30歳であったことになる。ワープロあるいはパソコンを使えばカレンダーはすぐ出せる。1936年のカレンダーを出してみたが当然のことながら合わない。ついでにというわけで1900年までさかのぼり1940年まで下った。1月29日が月曜である年は次の通り。

1900、1906、1912、1917、1923、1934、1940。

急いで付け加えるが、なにも1900年で止めなければならないという筋合いのものではない。『嘔吐』においては実に多くの年が現れている。筆者に見落としがなければ最も古くは1787年であり⁷、間接的にであればソクラテスマで登場するのである。1900年で止める理由としては、サルトルとロカンタンは共に1900年以降に生まれているという程度のことに過ぎない。

⁴ヴァリエントを考慮に入れるのであればこうは言えないが。

⁵1934年が合うのだから2年後の1936年は合うはずはなく、幼稚な考えだと言われればそれまでだが。

⁶ヴァリエントを考慮に入れるのであれば必ずしもこうは言えないが。

⁷ヴァリエントを考慮に入れるのであればこうは言えないが。

これらの年をながめると筆者の注意はまず 1917 年に行く。ロシア革命の年だからか。それはそれでオリエが面白い話を作っている。筆者の関心は別のところにある。この年にサルトルの母親が再婚する⁸。そして『嘔吐』においても 1917 年は現れているのである。オリエに見落としがなければ、そして筆者にも見落としがなければ次の 3 カ所である。

私はそれをラ・ロッシュェルの通りで 1917 年にアメリカ人兵士が口笛を吹いているのを聞いた。(OR p.28)

1917 年の冬の間、私が捕虜であった時、食事があまりにもひどかったので皆が病気になったのです。(OR p.125)

1917 年の終わりに私は捕虜になったのです。(OR p.135)

本論で取り上げるのは最初の 1917 年である。あとの 2 つは独学者の言葉である。サルトルは 1917 年にそれまで住んでいたパリを離れ、ラ・ロッシュェルのリセに転校し、義理の父と生活を共にする。母親の再婚、義理の父、ラ・ロッシュェルでの生活がサルトルの人生において決定的な意味を持っていることは周知の通りである。しかし、それが具体的にどのようなものであったかという点に関してはよく分からない。なぜなら、ラ・ロッシュェル時代にサルトルが書いたものが何も残っていないからである。もちろんサルトルの初期作品を集めた *ECRITS DE JEUNESSE* という本はある。そして現存する小説の中で最も初期に書かれたとされる *Jésus la Chouette* という小説の舞台は大部分がラ・ロッシュェル、時は大部分が 1917 年、話者である「私」の名は Paul、そして話者が宿っている *Jésus la Chouette* の villa の名が Remember、*Jésus la Chouette* の名は Laubré または Lautreck または Loosdreck。サルトルの実人生におけるラ・ロッシュェル時代の最初の学年の文学の教師の名が Loosdregt。そして *soldats américains* は現れないにせよ、*Américain(s)*、*cigarettes américaines* は出てきているのである。おそらくこの小説はサルトルのラ・ロッシュェル時代をある意味では忠実に表しているであろう。「ある意味では」と留保をつけるのには理由がある。いくらこのような「外的物証」とでも言うべきもの

⁸オリエは母親の再婚の年としての 1917 年についても書いているが、『嘔吐』の 1 月 29 日が月曜である年としては 1917 年を捉えていない。

を積み上げたところで、執筆時期は1922年の夏とされ、ラ・ロッシュ時代
の真っ只中で書かれた小説ではない以上、この小説がサルトルの実人生にお
けるラ・ロッシュ時代をそのまま描いていると考えることには危険が伴う
からである。少し別の言葉で言えば、サルトルが1905年に生まれ、1980年
に死んだという確実性とは明らかに性質を異にする。そしてこの小説の内容
に少し立ち入れば、mes parents, ma mère という言葉は現れるがほとんど描写
されていないし、話者である Paul の父に至っては登場すらしない。

またこの小説中に日付と曜日に関して不一致がある。コンタたちは、当然
気が付いていて、1917年10月1日は月曜であって日曜ではないと注で書い
ている(EJ p.505)。それはそうに違いないのだが、『嘔吐』を思い出せばロカ
ンタン記すところのロルポンはロシアでも活動しているのである。そしてロ
シアでは1918年までロシア暦が用いられていて、ロシア暦では1917年10
月1日は日曜なのである。コンタたちは何をしているのだろうかと言いたくな
る。

父親の不在という観点からは1906年も注目に値するのかもしれない。この
年にサルトルの父親が死ぬ。そして『嘔吐』においても1906年は現れてい
なくはないのである。ただしその場所はロカンタン記すところの JOURNAL 本
文中にはなく、編者の注にである(OR p.18)。そして OR p.1740 の注は
Hachette 社からの1904年刊の本を挙げている。さらに、JOURNAL の本文で
1906年が現れてしかるべきところは1904としているのである(Mort à
Polytechnique en 1904 : OR p.111)。奇妙な対称性を見て取ることが出来るの
ではないだろうか。サルトルはあまりにも明示的には1906年を書きたくな
ったのかもしれない。あるいは、サルトルは遊んだのかもしれない。

さて、コンタは1988年に一つの論文を発表している⁹。題名からしてオリ
エの本に言及があるのは当然であろう。この論文によれば、サルトルはマニ
ュスクリにおいてはまず、Lundi 20 janvier 1932 と書いて0を9に変えている
とのことである。サルトルが『嘔吐』の日付に関して意識的であったことの
一つの証拠と言えるのかもしれない。また1988年といえばおそらくコンタ
たちはEJの編集に取りかかっていたことであろう。1917年のカレンダー、あ
るいはもっと狭く見て1917年10月のカレンダーを何らかの方法で見ていた

⁹Contat (Michel) : «Manuscrit, édition originale, édition “canonique” établie avec l'accord de l'auteur, à quoi se fier ? L'exemple de *La Nausée* de Sartre», *Cahiers de Textologie*, n°2, «Problèmes de l'édition critique », Minard, 1988, p.141-148

ことは、上に述べた注から自明なのであるが、1988年のこの論文では1917年に言及がないのは筆者にはいくらか不思議に思える。

『嘔吐』から少し離れよう。筆者の知る限りでは、日付と曜日が記されているサルトルのテキストとしては『嘔吐』以外には、*Lettres au Castor et à quelques autres* と *Carnets de la drôle de guerre* がある。後者においては、明らかなサルトルの誤り（19 Février となるべきところが19 Janvierとしている）を除いては、日付と曜日に関しては現実と合わない部分はない。前者において日付と曜日の両方が記されている手紙はそれほど多くはない。ところが、数多くないそれらの手紙の中で奇妙なことがあるのである。LC p.104 には Laon, mercredi 25 avril とある。年は1937年。ところが1937年4月25日は水曜ではなく日曜なのである。例によって、4月25日が水曜である年を探すと、次の通り。1900、1906、1917、1923、1928、1934。そう、1906年、1917年、1934年が含まれるのである。また4月25日が正しいとすると日曜ということになるが、この手紙の中で、サルトルは「今朝2時間授業をした」と書いているのである。日曜に授業をするのだろうか。また1日程度のずれであれば、誰もが犯す誤りと言うことになるのかもしれない。しかしこの場合は単純なミスとは考えにくいだろう。

次の手紙は、[Paris,] jeudi [26 avril] である。括弧の中は、翌日の手紙だというポーヴォワールの判断が働いたのであろう。この日付と曜日も現実と合わないことは自明である。Bibliothèque nationale にあるというこれらの手紙の現物を見たわけではないが、ポーヴォワールがこう判断するところを見れば、Laon, mercredi 25 avril と本当に書かれているのであろう。また[Paris,] jeudi [26 avril] と書かれた手紙が木曜であったことは間違いないのであ。なぜならこの手紙の中で、サルトルはポーランの前日に書かれた手紙を写して、ポーランは手紙の中で「たとえば明日(木)」(LC p.110)と書いているからである。

『嘔吐』においてはサルトルは日付に関しては意識的であったであろうことは上に述べたとおりである。けれどポーヴォワール宛の手紙でまでどうして誤ってしまうのか¹⁰。

¹⁰しかし自分の論旨に都合のよい不都合だけを持ち出すのは誰に対しても fair ではないだろう。LCの中で、現実と合わない手紙がもう一通存在する。LC p.484 には Mercredi 15 décembre とある。年は1939年。ところが1939年12月15日は水曜ではなく金曜なのである。例によって12月15日が水曜の年を探すと次の通り。1909、1915、1920、1926、1937。この誤りのある手紙を重視せず、1937年の手紙を取り上げる理由は、『嘔

想像をたくましくすることが許されるのであれば、サルトルは1934年にせよ1917年にせよ1906年にせよいずれかの年のカレンダーを手元に置いていてうっかり誤ってしまったのではないであろうか。

オリエのように1934年を重視するにせよ、あるいは1917年、あるいはまた1906年に注目するにせよ、いずれにしてもプレイヤー版は改悪であったと思うのである。コンタが伝えるサルトル自身の言葉を引用して本論を終えたいと思う。

君たちは権威ができるテキストを作るつもりだろうが、権威のあるテキストは初版さ、今に分かるよ！(Contat, *op.cit.*, p.146)

付録

『嘔吐』のJOURNALの冒頭がLundi 25 janvier 1932である版はプレイヤー版以外にも存在する。近年出回っているfolio版である。それではfolio版はプレイヤー版の忠実な再録かと思えばこれがとんでもない代物なのである。コンマの有無や大文字小文字の違いなどは容易に見つけることが出来るだろう。

少し例を挙げる。プレイヤー版に収録する際、変更を加えた箇所、たとえばOR p.191のように従来の版では1932であったのがfolio版ではプレイヤー版と同様に1931となっている。しかしプレイヤー版では脱落しているとしか考えようのない *grattait moins fort (que) les doigts de la petite* (OR p.120)の*que*は従来の版と同様にfolio版にもある(おそらくコンタたちが底本としている初版本には*que*がないのであろう)。それではfolio版はプレイヤー版の編者たちが明確な意識の元で訂正した個所は全てプレイヤー版と同じかと思えばこれまたそうでもないのである。一例を挙げると、OR p.91の*honneur*は従来の版であれば*bonheur*、folio版でも*bonheur*と変わっていない。近年出回っているfolio版は得体が知れないのである。

吐』の公刊以前か以後かという単純だが決定的な違いにすぎない。